



32 戸島光孚ほか

《双鶏置物》 一点

大正五年（一九一六）

木製漆塗、蒔絵

総三九・六×八三・五×五九・五

大正四年（一九一五）の大札を祝って、その翌年に堂上華族より献上された置物である。木胎に蒔絵で装飾しており、脚は銀製である。蒔絵は京都の蒔絵師、戸島光孚（一八八二〜一九五六）が手がけ、下図は山元春挙、彫刻は国安稲香、塗りは岩村貞蔵と、いずれも京都の作家が担当している。漆下地や、蒔絵粉の色合いなどに工夫を凝らして、羽の表現、鶏冠の質感を巧みに表現している。このように実物大で、写實的に表された雌雄の鶏の置物は、明治二十年代から木彫や七宝、鑄造、蒔絵などさまざまな素材や工芸技法によって製作された作例が数多く知られており、明治期に見えるひとつの流行と言って良い。それは、明治二十一年（一八八八）に完成した明治宮殿の千種の間七宝による尾長鶏の置物が配置されたことや、明治二十二年の日本美術協会による美術展覧会に出品された高村光雲の矮鶏の木彫が明治天皇の御買上げを受けたことなどが、皇室をめぐる美術品製作の指針のひとつになったのであろう。本作や作品No.38のように、つがいの鶏の造形は、夫婦和合と吉祥の意味をもつ置物として大正、昭和期にもその伝統が引き継がれている。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 大礼 ― 慶祝のかたち

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 85

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 公益財団法人 菊葉文化協会

令和元年九月二十一日発行

©2019, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan